

絶えざる戦いの日々 — 坂野昇平先生を悼む —

記憶は常に曖昧さを含み、人の理解には過ちが付き物である。その曖昧さと過ちとによって事実が歪められる可能性を思う時、むしろ沈黙を選びたい思いに駆られる。しかし坂野昇平という一人の岩石学者が残した足跡の大きさを思えば、私が見聞した彼の生き様を書き記すことは、これから学問を志す若い人にとって益するところがあるかもしれない。(以下、客観的記述の部分では敬称を略する。)

坂野昇平は都城秋穂の愛弟子であった、と思われる。しかし二人の関係は常に緊張に満ちたものであった。都城は1950年代から60年代にかけて変成相の確立を目指し、関陽太郎、紫藤文子、岩崎正夫、橋本光男といった人たちと精力的に研究を進めていた。彼らは日本の変成岩研究の黎明を思わせる綺羅星のごとき人たちであった。坂野昇平は若年ながらこれらの人たちに伍して、同時期から論文を発表し始めた。都城と坂野は青海の結晶片岩類の研究によって藍閃石片岩相の確立という大きな目的を果たした。当時はTurnerの教科書などで都城にとっては我慢のならない変成相の解釈がなされていたし、日本でも藍閃石片岩は蛇紋岩の交代作用によって形成されると主張する人があった(都城, 1965)ので、この仕事は都城にとって重要なものであったに違いない。都城はどこかに書いている。「変成相の確立のために排除しなければならないと考えたのは、ストレスと交代作用であった」。Al₂SiO₅ 鉱物の相関係の提唱によって、Harkerのストレス鉱物の概念を打破し、当時日本で流布していた観念的交代作用の議論を「そのようなこともあるかもしれない。しかし、そのことと変成相とは別の問題である」と一刀両断に切り捨てた。このように本質のみを抽出して考察するというスタイルが都城の偉大な業績につながっていった。無論、複雑な地質現象をこのような美しい理論だけで理解しようとするのは危険を伴う。坂野の都城批判の一つはそこにあった。宇留野勝敏が阿武隈で川砂から藍晶石を発見し、それを都城に報告した時、自説に対する明瞭な反論を突きつけられた都城からは「それは例外的なものです」というにべもない返事が返ってきただけだった(宇留野談)。「都城は頭が先走るタイプだから」坂野はそう言った。



日本地質学会金沢大会(2001年)懇親会で。左より坂野昇平、筆者、志村俊昭、渡辺暉夫(故人)。

坂野昇平という人物を特徴付けるのは、批判的精神、公正、開かれた心、そして学問に対する献身である。批判的精神、彼の絶えざる戦いはそこから生じた。それゆえに彼は攻撃的であり、多くの人から恐れられていた。学問において誤った解釈を平然と提示する者、学問研究において自らの責任を果たしていないと彼に判断された者は、誰であろうと容赦なく糾弾された。そのような学問に対する厳しさは都城から受け継がれたものであろう。坂野は書いている。「都城先生は野外や実験で手取り足取り教えて下さる方ではなかったが、セミナーでの報告に対する批評から論文にまとめる段階では実に丁寧で(もっとも、時にはサディスティックではないかと思うこともあったが)、徹底的に指導して下さった(坂野, 1981)」。都城は独創的な罵倒用語を用い、それは弟子たちに伝染して言った、とも書いている。

坂野の学生であった筆者は金沢大学での修論を終える頃、部屋に呼ばれた。「ドクターはどうする? 東大の飯山さんのところに行くか、それとも九大に帰るか?」一瞬の逡巡の後に「飯山さんのところに行きたいです」と答えた私に、「君は良い仕事をしなかったから、東大には推薦しないよ」と坂野さんは冷たく言い放った。その時は悔しさに身が震えたが、それは確かに坂野さんの公正さとサディスティックな励ましであった。事実、数年後坂野さんは私の蛇紋岩における交代作用の仕事を評価して、特定研究の飯山先生の班に加えて下さった。

このような公正さと開かれた心、加えて冷たい優しさ。それゆえに多くの若い人たちが彼を恐れながらも敬愛し、彼の周りに集まった。金沢大学で多くの俊秀を育てたことは夙に有名であるが、当時の金沢大学には修士課程しかなく、修士論文の内容を次々に国際誌に掲載していった坂野の努力は並みのものではなかったと思われる。京都大学に移ることが決まった後、夜一人で仕事をしている坂野さんに呼ばれた。不断になく弱々しい声で「僕もここで随分頑張ったけれど、疲れたよ」と京都に移る理由を説明された。坂野さんが私に見せた最初で最後の弱音だった。しかし、京都大学で坂野さんが幸せになったとは思われない。一昨年、最後となった年賀状にこう書いてあった。「熊本を良い大学にしてください。僕も金沢にいた頃が一番充実していて、幸せだった」。

1965年にANUに留学するまで、坂野は東大で司令塔に罵倒され続けながら(坂野, 1981)、三波川帯の変成分帯などの仕事に従事していた。この三波川帯の研究に対する情熱は終生継続したが、帰国後は松井義人との共同研究により結晶内交換反応を世界に先駆けて定式化したり、結晶同士あるいは結晶とマグマとの間の元素分配の仕事を手がけたり、小沼直樹や松井義人らのアラユルニューム計画に深くコミットして研究の幅を広げていった。もっとも有名になったのはWoodとの共著による輝石温度計の提案であろう。これらの研究の基礎である結晶化学や化学熱力学を、坂野はほとんど独学で身につけたのではないかと思われる。簡潔にして含蓄の深い、それゆえに難解なGuggenheimのThermodynamicsやMixturesを、雪がしんと降り積もる金沢の夜が更けるまで読み耽っていた坂野さんの姿が目に焼きついている。1980年代後半からは、中国の超高压変成岩の研究に打ち込んだ。中国側との交渉には紆余曲折があり、決裂しかねない場面もあったらしいが、坂野さんにしては珍しくぐっとこらえたようである(坂野・榎並, 2002)。この経緯により中国から京都に招待した若手研究者Ye Kaiらが、研究者として大きく成長したことを坂野さんは喜んでいたし、Ye Kaiらも深く感謝していた。

京都大学へ移ってからは長年の無理から大病を重ね、身体中手術の傷だらけで正に満身創痍であった。しかし退官後も研究に対する意欲は衰えず、毎年開催される「変成岩などシンポジウム」

には必ず顔を出した。この研究会は言うならば坂野を慕って集まった人たちのゲリラシンポジウムである。このような会が自前で営々と継続されていること一つを取ってみても、坂野の影響力の大きさがわかる。晩年に至って都城の坂野に対する批判が強まった。個々の批判の内容を私は知っているけれども、その本質を私は理解できない。それは明らかに坂野を苦しめていた。坂野は都城を非常に尊敬していたし、都城も坂野を高く評価していたに違いない。その二人が晩年において理解しあえなくなっていたことは、私には大きな不幸に思える。7月24日に不慮の死を遂げた都城秋穂の後を追うように、坂野昇平は8月19日に亡くなった。凄絶な人生であった。

坂野さんの訃報を私はノルウェーの小さな港町で受け取った。万国地質学会議の地質巡検に参加していたのであった。外国からの参加者にそのことを告げると、著名な研究者たちが口々に“Big loss!”と叫んだ。坂野さんを個人的には知らないという人でさえ、「論文でその偉大さを知っている。大きな損失だ」と言うのだった。参加者の一人Ye Kaiは私と二人だけになると、「昨日、坂野さんの夢を見た。坂野さんがどんどん歩いて行くので、後を追おうとするのだが、どうしても追いつけない夢だった」と打ち震えながらそう言った。私は彼の拳に手を重ねて答えた。「君だけじゃない。誰も坂野さんには追いつけないのだよ」。

文 献

- 坂野昇平(1981): 藍閃変成相の確立—個人的覚え書。総合研究報告集「岩石の微細組織とその生成のダイナミクス」, 133-145。
坂野昇平・榎並正樹(2002): 超高压変成岩—地球深部との往復書簡(1)。地質ニュース, 569, 6-13。
都城秋穂(1965): 変成岩と変成帯。岩波書店, 458p。

坂野昇平氏略歴

- 1960年 東京大学理学部助手
1968年 金沢大学理学部助教授
1980年 京都大学理学部教授
1996年 京都大学大学院理学研究科定年退官, 同名誉教授
1983年 日本地質学会賞
1991年 イギリス鉱物学会名誉会員
2000年 渡邊萬次郎賞
その信条により政府からの叙勲固辞。

(熊本大学 西山忠男)